

私の研究



こどもの心

— 個人差の出発点

田辺 稔 (たなべ みのる)

福島学院大学 福祉学部 こども学科
教授



「私の研究」シリーズ2019年度は、昭和16年（1941）の創設以来、「真心こそすべてのすべて」という建学の精神に基づき、より地域社会に開かれた大学を目指し、実学に根ざした教育を行っている福島学院大学の先生方に、1年間ご執筆いただきます。どうぞご期待ください!!

はじめに

2017年9月に「公認心理師法^{*}」が施行され、我が国で初めて国家資格に位置づけられた心理専門職の資格が誕生しました。同法と公認心理師法施行規則に基づき、第一回国家試験が2018年9月に実施され、約27,000人が資格を取得し公認心理師として登録されました。民間資格ではありましたが「臨床心理士」の養成に続き、本学でも国家資格としての「公認心理師」養成に関わる指定科目を整備し、大学学部および大学院を通した一貫した教育課程を編成し公認心理師養成に取り組んでいるところです。

心理学に関する専門職といっても、今回の公認心理師や従来の臨床心理士の基礎は「臨床心理学」であり、公認心理師の誕生は臨床心理学の先生方や研究者の方々のたゆまぬ努力の賜と考えて

います。臨床心理学は専門ではありませんが、心のケアに人々の関心が集まり、教育、福祉分野ばかりではなく企業・事業所においてもその必要性が求められてきている事や、さらにはこのような気運の中で、心や性格、あるいはパーソナリティに興味や関心を寄せていただくことは、心理領域を専攻とする者にとってもある意味喜ばしきことです。

私の専攻である教育心理学領域でも、幼児の教育・保育場面で「性格の発達」や「行動の個人差」という観点は大切に扱われてきました。しかし、公認心理師や臨床心理士のような支援を対象とした「性格」のとらえ方と、発達を対象とした「性格」へのアプローチが必ずしも一致している訳ではありません。さらに言えば、支援を対象とした中でも認知行動的に捉えるか、現象学的な立場

に立つかにより性格やパーソナリティのとらえ方に大きな相違がありますし、発達の観点から見ても、幼児・児童へのアプローチと発達の初期である乳幼児とでは見方・とらえ方に温度差があります。

今回、本原稿を纏めていく機会を頂き、改めて発達初期の個人差の観点を見直してみたいと思います。私たちはいつ頃から心の発達における他者との相違、性格や個人差を見いだしているのでしょうか、それは親の養育行動にどのように関係しているのか一度確認していきたいと考えます。¹⁾

※ 公認心理師は「国民の心の健康の保持増進」に役立つ心理専門職の資格を担保するために、「その業務の適正を図り、もって国民の心の健康の保持増進に寄与することを目的（公認心理師法 第1条）」として誕生した国家資格です。文部科学省と厚生労働省との共同所管とされ、学校教育、福祉領域、また保健医療の分野で、支援を必要とする人へ、心理学に関する専門的知識・技術をもって援助を行う事を業務としています。

1. 個人差の研究は意外に最近のこと

私たちはいつ頃から心の発達における他者との相違、言い換えれば、個人差を見いだしているのでしょうか。生後間もない、「赤ちゃん」の時期は身長・体重に大きな差違はなく、ある程度の動作は観察できても、泣いているか寝ているかの状態で、極めて限定的で、その子らしさを特定できる材料は多くありません。家庭での育児が始まっても赤ちゃんの、その子らしさ、個性と言った場合、子どもを囲む大人たちにとっては、身体的な大きさや顔の特徴に関心が向けられ、また同時期に複数子どもらと比較出来ない状況も相まって、行動上の差まではあまり関心が払われない傾向にあります。

その子らしさを、性格やパーソナリティという観点で見ていく専門的な研究でも、幼児・児童あるいは思春期、青年期を対象とした分野では多くの研究がありますが、発達が初期になればなるほ

どその研究は少なくなる傾向です。^{2) 3)} 確かに新生児や乳児と比較し、幼児や児童以降の各段階のほうが大きな個人差を見いだしやすいでしょう。しかし、新生児や乳児に個人差が全く見いだされない訳ではありません。むしろ私たちは日常的な経験から「扱いやすい赤ちゃん」と「むずかしい赤ちゃん」の存在を理解していますし、「上の子と違って、この子はよくむずかる」といった言い回しから、赤ちゃんそれぞれの違い、言い換えれば個人差を了解しているといえるでしょう。

一般的にみて、個人差は、親の養育態度や兄弟姉妹の有無等を含む環境や生後の経験により、徐々に育まれるものと思われてきたことも幼児期以降の発達に関心が向いた要因ではないでしょうか。実際、新生児・乳児にも、個人差として観察される行動上の特徴が組織的に研究され始めたのは意外にも20世紀後半と心理学の歴史から見ても最近のことです。

2. 生得的な個人差と養育—子ども側の都合

新生児・乳児にも、個人差として観察される行動的特徴があることに注目し、組織的な調査研究を手がけたのはアレクサンダー・トマス(A.Thomas)とステラ・チェス(S.Chess)(1968,1986)と言うアメリカの精神科医のチームでした。彼らは、親の養育態度の相違や環境の違いだけでは説明できない個人差を想定し、生後2、3ヵ月の時点からおよそ12年間、100人を超す子どもたちを対象とした縦断的な観察と調査を行いました。⁴⁾

彼らの研究では、予め観察のポイントとして用意された幾つかの行動上の特徴を養育者に評価してもらう方法を用いて、際だった個人差が観察されにくいと思われていた乳幼児期以降、ある一定期間、幼児期から児童期まで比較的長期にわたって観察される特徴的な差を見いだしていきました。

用意された観察のポイントは、身体の活発な動きや静かな状態の継続時間の長さ、短さ、また運

表：子どもの示す典型例

	育てやすい子 (easy child)	ウォームアップの遅い子 (slow to warm up child)	難しい子 (difficult child)
気質的な特徴	睡眠や排泄など生活や身体的リズムが規則的。刺激や環境の変化にも適応しやすい。	新たな刺激や場面では躊躇しやすく順応に時間が掛かる。後に順応するようになる。	生活など不規則な反応であり、機嫌良く過ごすことが少なく、新しい刺激や環境の変化になれにくい。
関わり方の視点	順応しやすいが、養育者の躰が過度に影響されることもある。放任すると孤独感を高める。	子どものペースを尊重できる環境では順応できる。養育者側のペースでは不安や恐怖を強める。	一貫した態度が重要。罰は反抗心を高める。養育者側の感情コントロールが重要。

Thomas&Chess1977. 1981

鈴木乙史「性格形成と変化の心理学」プレーン出版1998⁸⁾より作成

典型例は上記に加え、何れにも属さない、平均的な次元として観察されるタイプがある。

動の強さや頻度を「活動水準」として、またオモチャや人物など初めての刺激に対する傾向を示す「接近（興味を示す・自ら近づいていく）／回避（不安や恐怖を抱き離れる）」、新しい環境に置かれたときの反応や慣れの速さ示す「順応性」など、9つのグループに分けられています。^{5) 6)}

さらに、彼らはこれらの特徴に基づいて、

「育てやすい子 (easy child)」

「ウォームアップの遅い子 (slow to warm up child)」

「難しい子 (difficult child)」

とする、子どもの特徴と養育者の関わりに関する3つの特徴的なタイプとどのグループにも属さない平均的な4つめのタイプを示しています。

「育てやすい子 (easy child)」とは睡眠や排泄など生活や身体的リズムが規則的で、機嫌良く過ごすことが多い子です。また新しい刺激や環境の変化にも適応しやすく、程度の差はあるでしょうが、不適切な対応があっても子ども側からの軌道修正も期待できるなどの特徴が報告されています。対して「難しい子 (difficult child)」は全体数からおよそ1割程度観察される子どもらで、「育てやすい子」と比較し生活など不規則な反応であり、機嫌良く過ごすことが少なく、新しい刺激や環境の変化になれにくいなどの特徴を示しています。一度むずかると長く尾を引くなどが報告されました。また「ウォームアップの遅い子 (slow

to warm up child)」は新たな刺激や場面では躊躇しやすく順応に時間が掛かるなどが報告されています。

このような発達初期に観察される個人差は、当然ながら、親の養育態度や生活環境からの影響が少なく、生得的で、非学習的な差として理解できます。このような人間が生まれながらもっている刺激などに反応する行動特性は「気質 (temperament)」と言う概念で説明されるものです。気質に関する研究は、発達初期ばかりではなく、性格そのものに関する研究課題ともなりますが、子どもの心の形成なり成長を考えていく場合、その出発点で子どもには子ども側の要因があることを理解しておくことは大切なことです。⁷⁾

個人差が親の養育態度など環境や生後の経験によってのみ育まれるものとするなら、「育てやすい子」は母親の優れた養育態度の結果ですし、「難しい子」は不慣れな養育の結果となり、育児中の母親に大きなストレスを与えます。しかし上述の通り、睡眠や排泄など生理的なリズムが規則的な子どもであれば、子どもの様子から欲求の意味を理解しやすくなり、養育行動の予測が可能となるなどストレスは軽減され育児に自信を持ち積極的になるでしょう。逆に、生理的なリズムが不規則で、新しい刺激や環境の変化になれにくい子どもであれば、泣き出す不機嫌な状態を理解することが難しく、予測も立てられない状態が続き、育児

そのものが大きなストレスになりかねません。

トマスらの研究は子どもの生得的な個人差を理解し、3つの類型それぞれのタイプに望ましい関わり方があり、望ましくない関わり方があると言う指摘となります。

3. 性格の形成をめぐる幾つかの要因

発達初期の個人差がその後どこまで影響を与えるのか、気質としての行動特性は安定的で持続性を伴うものなのでしょうか。気質による行動特徴が生物学的な要因や遺伝的要因を主とするものと考えれば、不変的な、あるいは変化しにくい側面が強調されることとなりますが、実際にはそれを支持する研究はあまりありません。前述のトマスらの研究でも年齢層が高くなるにつれ、気質としての一貫性が薄れてくることを示しています。気質そのものの解釈として、乳幼児期に観察される行動特徴が成人以降の行動特徴と同次元で比較検討できるものか、気質の連続性や一貫性の薄れには幾つかの理由が上げられますが、大きな観点として、特徴的行動の獲得過程には関わる相互作用、あるいは相乗的相互作用と呼ばれる子どもと養育者との関係性が指摘されています。⁹⁾

前述の3つの特徴的な類型でみた子ども側の要因は、一方的に母親なり養育者を悩ますだけではありません。子どもの気質が養育態度に影響を与えるように、育児行動が子どもの気質に影響を与え、その特徴を強調し、あるいは薄めていくなど相互の要因が大きく関わっています。母親なり養育者側の観点に立てば、養育態度そのものが、養育者自身の価値観や性格、家族構成や経済的な状況、さらには地域的な子育てに関する支援体制など複雑な社会的要因が影響を与えるもので、個々の子どもの行動特性の獲得は単一的な母子関係というより社会的相互作用の結果ととらえられます。むしろ子ども側の要因だけ、あるいは養育者側の要因だけで行動特徴が決定されるというとらえ方には無理があります。

発達初期の個人差、気質としての行動特性はそれ自体で以降の性格形成が説明できないように、親の養育態度だけで性格が作られていくものでもありません。性格形成における子ども側の要因として、発達初期の個人差を理解しておく必要があります。

引用・参考文献

- 1) 西方毅・本間玖美子編集 「子ども学講座1 『子どもと生活』」第2章「子どもの心」田辺稔 2010 一藝社
- 2) 上原 泉 2014 「乳幼児に関する研究動向－わが国の最近1年間における教育心理学の研究動向と展望」教育心理学年報 Vol53.1-13 教育心理学会
- 3) 木下 孝司 2016 「幼児・児童期の発達研究の研究動向と展望－わが国の教育心理学の研究動向と展望」教育心理学年報 Vol55.1-17 教育心理学会
- 4) A.Thomas&S.Chess 1977 林雅次 監訳 1981「子どもの気質と心理的発達」星和書店
- 5) 田島元信 2000 「社会的相互交渉と子どもの人格発達」多賀出版 p49
- 6) 東 洋、繁多 進、田島 元編纂、1992「気質」発達心理学ハンドブック 菅原ますみ 福村出版 p723
- 7) 鈴木乙史 1998 「性格形成と変化の心理学」プレーン出版
- 8) 上掲書 7) 鈴木乙史 1998
- 9) 上掲書 5) 田島元信 2000

<プロフィール>

玉川大学大学院文学研究科教育学専攻 修了
 専門領域は教育心理学
 現在 福島学院大学福祉学部こども学科 教授
 同大学大学院心理学研究科 教授
 福島市児童福祉専門分科会 分科会長